



愛知淑徳大学

## ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

## Newsletter

第29号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

発行年月日：2010年3月20日  
〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9  
Phone 0561-62-4111 EX 2498  
FAX 0561-63-9308  
E-mail : [igws@asu.aasa.ac.jp](mailto:igws@asu.aasa.ac.jp)

## IGWS 第29号ニュースレターの目次

○ 第22回定例セミナー報告 .....	1
○ 学生感想文 .....	3
○ 共生が私を生かすー主体的な人間を目指して .....	4
○ 就職氷河期の再来と“日本のジェンダー”通知表 .....	5
○ 第3回「ジェンダー視点の卒業論文」報告会 .....	6
○ 学生活動報告ー「これって愛？」デートDV寸劇を演じる / お知らせ .....	7
○ 2010年度ジェンダー関連授業紹介 .....	8

2009年10月23日(星が丘キャンパス)に、ジェンダー・女性学研究所主催第22回定例セミナー「少女マンガにみるジェンダー：〈男装の少女〉はどのように描かれたか」を開催致しました。以下はその概要です。

第22回  
定例  
セミナー

講師 押山 美知子さん  
(専修大学人文科学研究所特別研究員)



## 少女マンガにみるジェンダー

ー〈男装の少女〉はどのように描かれたかー

マンガの殿堂誕生かとその成り行きに関心を集めた昨年ほど、マンガが議論に上った年はないであろう。日本のマンガが世界を席卷していることは、海外で原作が映画化され、日本のキャラクターのコスプレを競い合う様子がマスメディアで取り上げられるのを見れば、一目瞭然である。マンガは若者の読みものという領域を超え、一つの文化として十分に世界で語り合えるツールになっているといえる。

今回、講師の押山美知子さんは、少女マンガとジェンダーが密接に関係しているという観点から、『リボンの騎士』(手塚治虫)、『ベルサイユのばら』(池田理代子)、『少女革命ウテナ』(さいとうちほ・ピーパパス)の3作品を取り上げ、「男装の少女」というテーマで講演された。

押山さんは最初に、日本の少女マンガの誕生についてその源流である少女雑誌について述べられた。少女雑誌は1902年(明治35年)に発行されたのが初めて、主に少女小説が掲載された。少女マンガとは、一般に少女雑誌に掲載されているマンガを指すが、マンガが少女雑誌に掲載されるようになったのは昭和になっ



てからだという。当初は挿絵っぽい絵物語が中心で、1945年（昭和20年）に「少女クラブ」が刊行されてから連載マンガが登場するようになったが、当時の作品に登場する少女はあくまでも典型的な造形に留まっていた。そんな時期の1953年（昭和28年）に、手塚治虫の『リボンの騎士』が連載マンガとして登場したのだ。

主人公サファイアは王女として生まれるが王子として育てられることになる「男装の少女」である。押山さんは、手塚本人が宝塚歌劇のファンであったことなどサファイアの造形と手塚のエピソードも紹介しながら、スクリーンに映し出されたサファイアの描写について解説された。サファイアは目、まつげ、鼻、口の造形が特徴的に描かれ、女性性から抜け出せない限界があるという。特に内面を語るといわれる目の描写は、他の男性とは明らかに違う。さらに手塚は、マンガを読む時に読者が視線を右から左へ移すことを利用し、構図においても男女で描き分けるという。サファイアが戦うシーンでは、右側にサファイアを配置し能動的に描き、逆に困惑した恥じらいのサファイアを描く時は左側に描くのである。また知力で戦うことを試される場面では、サファイアに「性別越境」が見られずパフォーマンスレベルに留まっているという。「リボンの騎士」では少女の内面と身体性は本質的で不変的なものであり、男性性が女性性にとって代わることはあり得ないのだ。

続いて、1972年（昭和47年）「週刊マーガレット」から連載が始まった『ベルサイユのばら』を分析された。通称『ベルばら』は日本の少女マンガ史における最も有名な「男装の少女」キャラクターを生んだ作品であり、70年代を代表する人気作である。『ベルばら』は、多面的に歴史を描きたいという池田の希望で主人公が3人いる。主人公の一人である「男装の少女」オスカルは、男性性の突出した過激さと相手を思いやる女性的な優しさが表裏一体で描かれるという。つまり女性性を内面に秘めたままなのだ。しかしもう一人の主人公アンドレ（男性）とオスカルが対峙し、アンドレが横顔で描かれ両者の目がクローズアップされると、男女差以上に両者は差異がなく同質性が浮き彫りになる。したがってオスカルの描写は中性的なのだという。オスカルの「性別越境」＝成長の軌跡はここでも内面を語る目の描写の変化によって、男性性のもつ知性、知的な内面を獲得していく過程として捉えることができると指摘された。最後にオスカルの死の場面を映し出して、オスカルの背後に女神を思わせるモチーフが描かれている点に言及された。これは、オスカルに神話的存在としてのイメージを付与し彼の死を神話化していると解釈された。すなわちオスカルの死は、既成の価値観や制度の枠組みにとらわれることのない次元へと引き上げられることで、自立した主体的存在としての自己を永久的に保持できたのだという。最終章の掲載された雑誌の表紙が、ドラクロアの自由

の女神であることも示唆的だと指摘された。

最後に取り上げられたのは『少女革命ウテナ』の「男装の少女」ウテナである。ウテナは自分を「ボク」と呼び、「王子様になりたい」という男性役割を担っているがその背景にはお姫様願望を秘め、小顔で長いまつげ、ピンクの学ラン、短いスパッツで描かれる。学園闘争の末、ウテナは「バラの花嫁」という女性性を刻印されるがそれに同一化できない。そのような自己の存在と、女性＝客体として位置付ける世界の謎を解き明かすべく、ウテナは、「男でも女でもない強さと気高さ」の内面化を立脚点に、「性別越境」者としての自己確立を果たす。このようなウテナは、男性性と女性性の表象記号を組み合わせた切れ長細眼で描かれているという。押山さんは、ウテナの闘いは、非対称のジェンダー枠組みそのものとの闘いにも思えるという。

「男装の少女」は、既成の“少女”や“女性”という定義に同調せず、一つの枠組みの中に抑え込まれない自由さを持ち続け、多様な描き方の可能性を見せているといえよう。ご講演後、マンガの持つ魅力とジェンダー表象について、それぞれ、または双方に関心を寄せる学生らから時間の経つのも忘れるほど、活発な質疑応答が繰り返された。

（文責 IGWS スタッフ 高橋 博子）



# 学生感想文

押山美知子先生の講演では、男装する少女を例に少女マンガにおけるジェンダーについてお話しされました。普段、あまり少女マンガを読まない私にとって、少女マンガにおけるジェンダーは関心の対象ではありませんでした。それ以上に少女マンガというジャンルそのものに対して、女性的であるという意識を強く持っていました。しかし今回の講演では、そんな私にも分かりやすい、男装する少女という性的越境を望むキャラクターからのアプローチでしたので、少女マンガが内包するジェンダーの問題を大変スムーズに考えることが出来ました。女性らしさや男性らしさが求められる世の中において、少女が男装をし、自らの性に対して疑問を持ち、懐疑心を持つように本来の性を見つめる—その行為自体にも先天的に与えられた性に対する自己反乱を見ることが出来ましたが、私は作者が考える女性性、男性性が、それぞれのキャラクターに大きく影響を与えていることに深く興味を持ちました。

本講演では主に『リボンの騎士』（1959-60年代、手塚治虫）『ベルサイユのばら』（1970年代、池田理代子）『少女革命ウテナ』（1990年代、さいとうちほ・ビーパパス）というそれぞれの時代を代表する作品を

男装の少女と言っても、当然一括りに出来るものではない。今回のセミナーで押山美知子先生が扱った『リボンの騎士』のサファイアにおいては少女的男装、『ベルサイユのばら』のオスカルには中性的役割、そして『少女革命ウテナ』ではウテナの性別を超えた人間としての存在といったように、男装の少女には多種多様な役割や意味がある。私にはサファイアは男性からみた男性的女性性が、オスカルには女性が望む女性的男性性が色濃く反映されているように感じる。ではウテナの男装にはどういった視点の影響が反映されているのか。

『少女革命ウテナ』という作品はビーパパスが原案し、さいとうちほのマンガと、幾原邦彦監督のテレビ版及び劇場版のアニメがある。アニメの原作はマンガだが、アニメ監督の幾原邦彦は原案のビーパパスのメンバーであるため、マンガとアニメを分けて考えることはなかなか難しい。

劇場版アニメ「少女革命ウテナ アドゥレセンス黙示録」には興味深いシーンがある。それはウテナが車に変身（ウテナ・カー）し、アンシーとともに学園を脱出するというシーンである。ウテナ・カーは大きな障害に直面した際、当初の形からもう一度変形する。

## 花井 徹平

例にお話しをされました。もちろん作品性や描かれた時代が違うので比べることは難しいのですが、男装する主人公と他の男性キャラクターとの描かれ方の違いに、それぞれの作者のジェンダー観が込められており、そういった違いを見るだけでも、男性性や女性性の持つ幅の大きさを実感させられました。同じ男装であってもキャラクターの性格自体は様々で、性別越境の手段も様々でした。肉体的な問題からどうしても越えられない壁を感じたり、精神的にも男性との違いを主人公が実感する場面があったりと、性別越境の難しさを改めて思い知らされました。マンガというビジュアル先行のメディアでは、キャラクターの姿、形を前面に押し出すことが出来、ビジュアルだけなら男性が女性になることも、またその逆も容易に出来てしまうということをおもいました。だからこそ、内面的な男性性、女性性といったジェンダーの問題を扱う時に男装する少女というジャンルが生まれたのかも知れません。これからもそういった部分に目を向け、ひとつのジャンルとしての少女マンガだけではなく、少女マンガの中に存在しているジェンダーの問題も是非考えていきたいと思いました。

（本学文化創造学部4年）

## 望月 純

その形状から変形前は女性器つまり女性性そのものを、変形後は男性器つまり男性性そのものを表現していると思われ、正念場では「男らしさ」を必要としまっていることがうかがえる。結局このウテナは「王子様」と「お姫様」、そして男と女という概念に縛られていたのかもしれない。しかし、最終的には車のボディ部分はなくなり、エンジンやタイヤといった自動車が走行に最低限必要な部分のみになり、ここに性別を超えた人間という存在が描かれたのではないだろうか。私は『少女革命ウテナ』をジェンダー的性差、特に男性主義を否定しながらも、同時に安易なフェミニズムにも疑問を投げかけている作品だと考える。

ウテナの男装は誰の視点からの男装か、それは外部からではなく、ましてや男性からでも女性からでもない、サファイアやオスカルやウテナといった男装の少女自身からみた、望んだ男装であったのではないだろうか。セミナー中、押山先生が『少女革命ウテナ』を男装の少女ものの一つの到達点と捉えていると言われたように、少女による少女の革命を描いたこの作品は正に少女たちの一つの到達点であったのだろう。

（本学文化創造学部4年）

## 共生が私を生かす – 主体的な人間を目指して –

渡邊明日香

今の私は、いくつもの顔を持っています。挙げればきりがありませんが、①2人の娘の母親、②妻、③専門学校等の心理学の非常勤講師、④大学院研究生、⑤豊田市の子どもにやさしいまちづくり推進委員など、といったところでしょうか。随分といくつもの役をこなしているなと時々自分でも思いますが、それもこれもすべて、共生を目指し、それを理解し、協力してくださる周りの人たちのおかげだと思っています。

私は文学部コミュニケーション学科を卒業後、コミュニケーション研究科人間コミュニケーション専攻を修了し、在学中は生涯発達心理学を中心に学んできました。修了後マーケティング会社に就職したものの、会社員生活には違和感を覚えながら日々を過ごしていました。当時、大学院を出て一般企業で働く文系女子は名古屋では少ないのに、そもそも私自身が、頭の中の想定だけで、現実はどうなるのかという覚悟が足りなかったと今では思っています。とにかくふとしたきっかけで私は福祉施設職員として社会人生活を再スタートさせることになりました。学部時代にボランティアサークルDo!で活動していたので大丈夫だろうと思っていました。

実際に働いてみると、私にとっては全く新しい世界で、今までのサークル活動は甘いものだとよく分かりましたし、知的障害者の人たちの生活を保障するということがどういうことなのかと日々、勉強することとなりました。当時、障害者は福祉施策の措置対象でしたが、私が見た彼らは施されるのではなく、主体的に生きようとしていました。ちょっとこだわりは強いけれど、ちょっと気持ちやうまく言葉で伝えられないこともあるけれど、「彼らはコミュニケーションを取ろうとし、当たり前だけど、同じ人間だ」「自分は彼らと同じ目の高さで物事を見ているだろうか」。そんな当たり前のことを彼らに教えてもらえた感じがしています。学生時代、心理学を主に学んできた私には、余計に新鮮だったこともあるでしょう。ここでの日々を学生たちに伝えたい、知的障害者から学んだものを持って現場に行きたくて。いつしか私の夢は次世代育成へと向いていました。

施設職員勤務中には結婚・妊娠・流産・再び妊娠を経験しました。最初の妊娠は、一週間絶対安静の末の流産で職場に大変な迷惑をかけました。現代の女性の就労はM字型就労が主流です。私は流産にも負けず、仕事に励みたかったのですが、そこでは何を言われても働くという強い意志が必要だと思知らされました。2度目の妊娠でも当直中に突然の発熱があり、やむなく当直を交代してもらうことができました。「妊娠は病気じゃない」そうした言葉が耳に届き、発せられたのが妊娠・出産を経験した女性職員からと知った時には、誰が女性の敵となるのだろうかと考えさせられました。独身時には考えが及ばないことが、結婚や、妊娠・出産を経験する時には起こります。理想と現実の違いは思い知らされます。一般に、妊娠・出産問題に立ちだかっている

るのは、性差や産む機会を持ち得ない男性の意識の壁のように言われますが、女性がいた方が多様な考え方とする考えこそが、ジェンダーに縛られている気がします。本来、性別に関係なく多様な考え方、“ジェンダー・フリー”を要求すればよいのです。昔、小学校のテストで「洗濯など家事をするのは誰ですか？」という問題があり、私は“お父さん”と答えました。答えは『×』と返ってきましたが、我が家では『○』だったので。自営業の父が家事をこなし、母はサラリーマンだったので。

私は偶然にも結婚する時に夫にこんな話しをしました。「私は、自分の好きなように生きていきたいと思っている。だから、仕事をする時もあるし、しない時もあると思う。お金にならない仕事も“仕事”と言って出かけることもあるだろう。それでも、あなたはそれを仕事と認め、そして、私のやりたいことを応援してくれますか」と。結婚は27歳でしたが、それまでに『自分の生き方(考え方)は変えられない。だから自分の生き方を理解してくれる人でないと結婚は無理だろう』と思っていました。未婚で今を迎えていたら、人生の守りに入り、挑戦に躊躇していたかもしれません。ですから、のろけになります。夫と出会えたことは本当に奇跡です。夫の応援があり、出産後、新たな仕事に挑戦することができました。新たな挑戦には自己投資(経済的・時間的にも)も必要でしたが、育児もできる限り、夫婦それぞれが主体として行ってきました。育児は365日24時間です。こうして原稿を書いている間も誰かが子どもたちを見てくれるからこそ、書くことができるのです。

子育てをする限りは、「自分は頑張って仕事も家事も育児も何でもこなすんだ！」そんなことを思っていた頃の自分は強がりばかり目立ちました。高学歴の母親ほど育児ノイローゼになりやすいという統計がありますが、例にもれず、私もそうになりました。「おっぱいがあるのに出ないなんて役立たずなおっぱいですね」と、にこっと笑いながら他人に言われ、他意はない一言に傷つき意味もなく涙があふれました。そんな時に手を差し伸べてくれた周りの方々には本当に今でも感謝しています。地域社会が希薄になってきている今では、伸ばす手を忘れてはいけなく、伸ばされた手は感謝さえ忘れなければありがたいと私は思います。この共生がなければ今の私はなかったと言っても過言ではありません。人は一人では生きていけません。誰かを支え、支えられ、生きています。実は自分の知らないところで誰かを支えている可能性もあります。自分らしく生きたいと思う人には共生を提案します。それこそが、自分を生かしてくれ、さらには新しい自分を発見させてくれるのです。

母校である貴校のますますの飛躍を心よりお祈り申し上げます。

(本学コミュニケーション研究科 1998年卒業)

## 就職氷河期の再来と“日本のジェンダー”通知表



浅井敬一郎

「ジェンダー」という「言葉」は本学ではとても身近なものとなっているが、私自身、実はその中身についてはよく理解していない。そこで、ジェンダーの研究者でなくとも入手可能な資料を用いて、どのような指標がジェンダー格差として使われているのかを検討し、日本がいかにジェンダー後進国として評価されているかを紹介したい。そして本学の頼もしい学生たちのエピソードを述べたい。

まず国連では国連開発計画（UNDP）が、特定分野における機会不平等を明らかにする指標として“Gender Empowerment Measure（GEM）”という指数を毎年発表している。この指数が示すジェンダー格差は、「男女の国会議員比率」、「男女の専門職・技術職比率と管理職比率」、「男女の推定勤労所得」の3つのデータを主として用いて算出される。2009年における日本のGEMは対象109カ国中57位であった（[http://www.undp.or.jp/hdr/pdf/release/Fast%20Facts\\_Japan\\_JPN\\_Finalized.pdf](http://www.undp.or.jp/hdr/pdf/release/Fast%20Facts_Japan_JPN_Finalized.pdf)）。

次に世界的に有名な企業経営者、政治家、研究者、ジャーナリスト、NPOなどが一堂に会し、世界が直面する問題について議論する「ダボス会議」。私は毎年その内容に高い関心を持っている（この原稿を書いている2010年1月30日は、ダボス会議が開催されている）。このダボス会議を主催しているスイスのNPO「世界経済フォーラム（World Economic Forum）」が、2009年10月下旬に発表した“The Global Gender Gap Report 2009（<http://www.weforum.org/pdf/gendergap/report2009.pdf>, p.119）”によれば、2009年の日本の男女平等指数（ジェンダー・ギャップ指数）は、調査が行われた134カ国中なんと101位。2006年の80位から順位は落ち続けている。日本においてもジェンダー格差に対する改善努力はなされているとは思いたい、海外諸国は日本以上のスピードで格差是正に取り組んでいるのであろう。

この報告書では、男女の出生数格差（89位）、寿命格差（1位）といったジェンダー格差として理解に苦しむ指標もあるが、日本の順位がこれほど低い要因は、「女性の管理職への登用の低さ（109位）」、「女性国会議員の少なさ（105位）」、「男女間の収入格差（100位）」、「同一労働に対する賃金格差（99位）」であると考えられる。これらの問題は、少なくとも私が大学生の頃から指摘されている項目であり、四半世紀以上にわたり大きな改善が見られなかった問題なのであろう。

2009年度後期に担当した「ヒューマンリソースマネジメント（人的資源管理：3、4年生向け）」の授業の中

で、上記の日本におけるジェンダー格差について取り上げたが反応は冷めたものであった。例えば「同一労働、同一賃金」のトピックの中で「同一価値の労働に対する同一報酬の原則の承認」は、「ILO（国際労働機関）憲章の前文において、最も重要な原則の1つとされている」という話に対して、「60年以上経っても解決されないから、まだお題目として残っているのですね」という反応である。

また、非正規労働者が正規労働者と同等の仕事をする機会が増え、「同一労働、同一賃金の問題は、今後より一層大きな問題となると思いますが、皆さんはどう考えますか」という問いに対して、「仕方がないですよ先生、それが現実なのだから」といった具合である。

他方、反応が高かった項目としては、607万人といわれている「企業内失業者」が学生自身の雇用の足かせになることへの戸惑いや、経済協力開発機構（OECD）が2008年に、「日本は若年層が安定した仕事に就けるよう、非正規労働者の雇用保護と社会保障適用を強化するとともに、正規雇用の雇用保護を緩和せよ」という内容の勧告を出したことに対し、「日本の正規雇用者がそれほど雇用保護をされているとは思わない」という強い反発ともとれる意見が多く出た。

そして「総務省の年代別、性別による完全失業率のデータから若年労働層では、女性の失業率が低いのはなぜか」というレポート課題に対し、「非正規労働の多くが女性を占め、このことが女性の失業率を下げている。そしてその賃金格差がバブル崩壊後の日本の企業収益を下支えしている。大企業が賃金の安い下請け企業から安い価格で部品を調達し利益をあげているような構造が同一企業内で起こっている」という内容の回答に感心させられた。

2011年4月採用の就職活動がスタートした。反応が冷めていようが、高かろうが、学生自身が自分の皮膚感覚で上記の事柄を自分なりに咀嚼し、意識していることには変わりはない。先進国最悪のジェンダー格差が存在していても、ひとまずそれは置いておき就職せざるを得ない。ますます厳しさを増す日本の雇用環境ではあるが学生諸君には就職活動を乗り切って欲しいと願わずにはいられない。

（本学ビジネス学部 准教授）

## 第3回「ジェンダー視点の卒業論文」報告会 開催

2010年1月27日(水) 長久手キャンパス 827教室

「ジェンダー視点の卒業論文」報告会は、今年で3回目を迎えます。

今年度は、現代社会学科より2名、コミュニケーション心理学科より1名、英文学科より1名の報告がありました。学部を問わず、ジェンダー・バイアスに意識的な卒業論文を書いた学生らによるこの報告会は、ジェンダー視点を共有し合う新たな刺激の場所となりました。また相山女学園大学より2名の学生が聴講に参加され、活発な意見交換がなされました。以下は報告者の顔触れと卒業論文のタイトルです。

「タイと日本における人身売買の実態  
～なぜタイ・日本は売春国となってしまったのか」



横田 敦子

現代社会学部現代社会学科

横田 敦子

「夫婦別姓に関する調査分析」



岡田 唯

現代社会学部現代社会学科

「男女におけるジェンダー・パーソナリティの発達の  
変化過程について～高校生、大学生、社会人を対象に」



浅井 千穂

コミュニケーション学部コミュニケーション心理学科

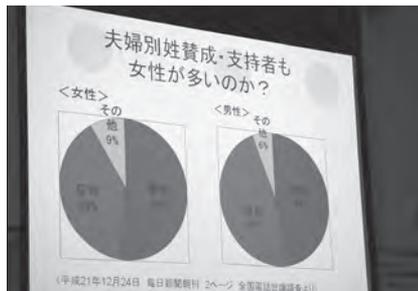
浅井 千穂

「『寝盗る女』から見る人間性」



文学部英文学科

本多由布子



### 学生感想

他大学の学生も参加されて発表の広がりを感じました。茶話会では自分とは異なる研究視点やアプローチ方法を聞くことができ、よいリフレッシュとなりました。(伊藤 真希)



報告会の後に  
茶話会を開催し、  
終始和やかな  
雰囲気でした。



## 学生活動報告

## 「これって愛？」 — デートDV寸劇を演じる

私たちジェンダー研究会は、2009年11月22日に、名古屋市男女平等参画推進センター(つながれっとNAGOYA)において、「デートDV」という社会問題の寸劇を上演する機会を得ました。

「デートDV」とは、簡単に言えば「恋人との間で起こる暴力」のことで、近年若者の中で社会問題になっている現象です。「デートDVを考える」という本研究会の分科会の中で、こうした現象は学生として決して無視できず非常に身近な問題であると考え、この問題を人々にもっと知ってもらう活動として、寸劇という方法を考案しました。

寸劇という形式は、研究会のメンバーの誰もが初めての経験だったので、当日までの練習や打ち合わせは困難を極めました。「デートDV」を身近に感じてもらうためには、恋人間のやり取りをどのような表現にすべきなのか、どうすれば相手に分かりやすく伝わるのかなど様々なことを考える必要がありました。当日まで気苦労が絶えませんでした。メンバー全員が緊張を崩すことなく本番を迎え、演技、ナレーター、音響など、自分たちの役目を懸命に果たすことができました。

今回の寸劇の発表で大変だったのは、社会問題を分かりやすく伝えるために試行錯誤したこと。「暴力」という側面を強調しすぎて、見ている人に「あんなこと私には関係ない」と捉えられてもいけません。「愛すること」と「暴力」は当然違いますが、それがなぜ「恋愛場面」になった途端にその境界が曖昧になってしまうのか、その疑問を忘れずに、登場人物の台詞から動作にいたる細部まで、何度も検討と修正を重ねました。

しかし全メンバーが、苦勞の分だけ「デートDV」という社会問題の難しさを感じることができたのではないかと思います。今回は「デートDVをなくす」ためのものではなく、「デートDVという社会問題の存在とその警鐘」という漠然とした目的の中で多くの模索を繰り返しました。今回の「寸劇」が完成したことにも、素晴らしい達成感を得ることができました。この活動を通してメンバーそれぞれが、ジェンダーを考える上での新しい視点を得ることができたと信じています。

(ジェンダー研究会 森靖博)



学生の自作自演の寸劇「これって愛？—デートDVを考える」をDVD(15分)にしました。  
貸出しも致しますのでジェンダー・女性学研究所へお問い合わせ下さい。

2010年ジェンダー・女性学研究所主催

連続講座の  
お知らせ

「装う / 奏でる / 話す — ジェンダーを演じる」(仮称)

開催日 6月5日(土) 6月12日(土) 6月19日(土)(3回を予定)

場 所 愛知淑徳大学星が丘キャンパス

時 間 13:30~15:00

詳細につきましては後日大学内ジェンダー・女性学研究所HPに掲載致します。

〈2010年度(前期 / 後期)〉 21世紀の今、ASUのジェンダー論、女性学・男性学がさらに面白い!! (一般の人も受講できます)

## 愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

### 開放講座

**女性学・男性学(前期/後期)長久手 / (前期のみ)星が丘**

講師 / 中島美幸

#### ■概要

男女についての定説化した知識、それによって作り出された役割、人格の内部に及ぶ性別化の影響とその結果生まれる病理などについて、さまざまな事例や理論を紹介し検討する。

<問い合わせ先> エクステンションセンター

〒464-8671 名古屋市千種区桜が丘23

TEL: 052-783-1665 FAX: 052-783-1621 (直通) 受付日時(月~金)9:00~17:00

<http://www.aasa.ac.jp/extension/index.html>

<申込期間>

**前期** 2月15日(月)~3月5日(金)必着

**後期** 7月26日(月)~8月20日(金)必着

### 聴講・科目等履修(学外向け)

**ビジネスとジェンダーII(後期)長久手**

講師 / 原山恵子

**ジェンダー論(前期/後期)長久手**

講師 / 石田好江 小川明子 小久保潤子

<問い合わせ先> 教務事務室

〒480-1197 愛知県長久手町長湫字片平9

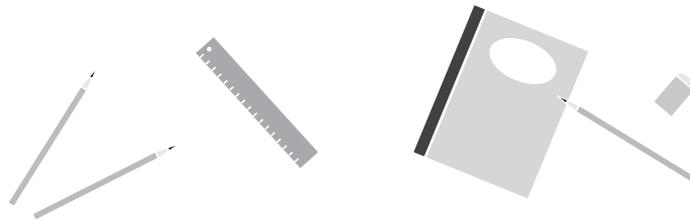
TEL: 0561-63-2378 FAX: 0561-63-1844(直通) 受付日時(月~金)9:00~17:00

<http://www.aasa.ac.jp/factory/kamoku/index.html>

<申込期間>

**前期** 2月15日(月)~2月24日(水)必着

**後期** 6月21日(月)~7月2日(金)必着



### 編集後記

今年度後半のセミナーでは、押山美知子さんが、「少女マンガにみるジェンダー」という演題で、一文化を形成しているマンガの世界について、ジェンダーを切り口に詳細に解説をして下さいました。マンガ制作にかかわる学生、ジェンダーに関心を寄せる学生双方から、活発な意見が飛び交い盛況な講演会でした。またジェンダー研究会の学生らの自主制作による「デートDV」寸劇が、「つながれと名古屋」で上演されました。29号ではこの模様を掲載致しました。  
(高橋 博子)

### ASU・IGWS2010年度

運営委員

平林美都子(所長兼) 石田好江

國信潤子 佐藤実芳 西 和久

森井マズミ 米倉五郎 若松孝司

スタッフ

高橋博子